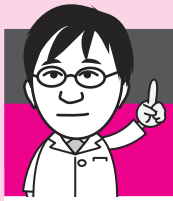


教授の『職場の健康づくり研究室』

第135回 夏の庭

夏が近づくとちょっとうんざりする。実家の雑草退治が本格化するからだ。私が小さい頃、美しく掃き清められていた庭は、いまでは雑草と雑木の天下である。雑草といってもいろいろだ。カラスノエンドウ、つた性植物のヤブガラシ、藤（フジ）、葛（クズ）はいちど根付くと根絶できない。チガヤはもっとやっかいだ、何度切っても生えてくる。ドクダミやシダもどんどんはびこってくる。そうか、庭というのはきわめて人工的な環境なのだ、いろいろな植物が混成する状態が本来の自然なのだな、とあらためて感心する。

▼草刈り、また草刈り

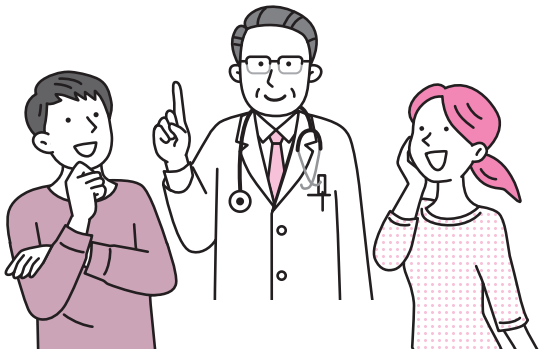
とはいっても、放置すれば外来植物がどんどん拡大するので、まずは草刈りと除草剤でストップをかける。数年間取り組んでわかったことは、どの植物も根が残っていれば翌年には必ず再生するということだ。地下茎や地上のランナーで広がるものは、ほとんど根絶はできないのではないかと思う。

裏手の竹やぶも同様だ。子どもの頃は、タケノコの季節が楽しみだった。祖父と鍬をかついで竹やぶに入り、孟宗竹のタケノコを掘る。夜になれば、タケノコの醤油煮をおいしくいただいた。ガリッとした歯ごたえと甘い醤油の香りが好きだった。竹は稲を干すための竿や垣根の補修など、いろいろな用途があった。でも、いまは使い道がなくなり、油断すれば屋敷のほうへ進出する地下茎をもった厄介者である。家族が多かった半世紀前は、米、野菜（なす、きゅうり、かぼちゃ、にんじん、玉ねぎ、とうがらし）、果物（すいか、ぶどう、うり）、そして農作業に使う竹、藁、縄など、すべて自前で作っていた。正月はもち米を炊いて木臼で餅をついたし、味噌も漬物も自家製だった。生ごみも裏に穴を掘って埋めていた時代で、ゴミ回収車なんて存在しなかった。そういう意味では、すごくエコな暮らしをしていたわけだ。

▼庭を維持する意味

荒れた庭を見るにつけ、美しい庭を維持するには目に見えない手入れがどれほど大切だったのか、身に染みてわかる。日々の落ち葉や雑草の始末、年2回の庭木の剪定、トイや用水路の掃除、屋根の補修など、どれひとつもないがしろにできない。庭を大切にした祖父には、苦労して作り上げた美しい庭と手入れの行き届いた家への強い愛着があったのだろう。長く実家を離れた私には、実家への郷愁はあっても庭への愛着はあまりない。なぜなら、自分で苦労して作り上げたという実感がないのだから。私にはむしろ、鳥取県西部で自分の家族と一緒に暮らした家、大学で苦労して育て上げた地域医療の人材の方がずっと大切である。自分の人生で苦心して成し遂げたものにしか、真の愛着はもてないのではなかろうか。死して美田を残さず、まさに至言である。

ただ、子どもたちや後輩たちには、私の想いを引き継いでほしいと祈るばかりである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授
谷口　晋一
（たにぐち　しんいち）